

(別紙 2)

## 審査の結果の要旨

氏名 澤海 崇文

本論文は、対人場面におけるコントロール方略の分類について、批判的な検討にもとづいた比較文化的実証研究を行うことによって、日本人のコントロール方略について新たな知見を提供するものである。これまで、コントロールについては、自己の要求に合うように外界を変化させることを目指す一次的コントロールと、自己を変化させて外界に合わせることを目指す二次的コントロールという大分類については、多くの研究者に受け入れられていたが、それぞれのタイプのコントロールのより詳細な分類については、諸説が存在していた。本論文では、そのうち、一次的コントロールを(a) 個人直接コントロール (b) 個人間接コントロール (c) 代理コントロール (d) 集団直接コントロール (e) 集団間接コントロールの五種とし、二次的コントロールを一種のみとする分類法を採用し、それに基づいた実証研究を進めている。

まず、研究 1 では、コントロール方略に関する上記分類の妥当性を確認するため、研究参加者が自由に記述したコントロール方略を 2 名の評定者にカテゴリ分けしてもらったところ、評定者間の判断が非常に高い割合で一致していることが分かった。さらに、研究 2 においては、どのコントロール方略を志向するかが、分類から予想される個人特性および状況要因と有意に関連していることも確認している。これらの結果から、分類法の妥当性が確認できている。

次に、研究 3 において、人が各コントロール方略を採用する際に、自分にとって好ましい理想の方略と、自分が現実に採用するであろう方略が必ずしも一致しないことを見出している。研究 4 では、とくに個人直接コントロール方略は一貫して理想的選択度合いが現実的選択度合いを上回り、二次的コントロール方略は一貫して現実的選択度合いが理想的選択度合いを上回っていることが明らかになった。

そこで、研究 5 と 6 では、理想と現実の選択とのギャップに関するモデルを提案し、その妥当性を検討している。その結果、状況が変わっても理想と現実の選択とのギャップのパターンは不変であり、個人直接コントロール方略—他のコントロール方略—二次的コントロール方略の順に連続的にギャップが減少するという傾向が再現された。さらに、文化的にも、イスラエル、ニュージーランド、韓国でも同様の傾向があることが見出されている。

以上、本論文は対人場面におけるコントロール方略について、新たな知見を提供しており、日本におけるコントロール方略研究の進歩に大きな貢献をするものである。さらに、比較文化的にも、コントロール方略志向の文化的な一般性が示されたことにより、比較文化的研究にも大きな影響を与える可能性がある。よって、本審査委員会は本論文が博士(社会心理学)の学位に値するものと判断する。